1. コラム：ボーカロイド文化の奥深さ

「新ジャポニズム」という言葉に興味を引かれ、『NHK スペシャル「新ジャポニズム 第２集 J-POP “ボカロ”が世界を満たす」（放送３月 16 日）』 https://tinyurl.com/27ahdnac の録画しておいたビデオを観た。番組を観て、初めて「ボーカロイド」、「ボカロ文化」なるものを知った。

ボカロ（ボーカロイド VOCALOID）は、2003 年にヤマハが開発した音声合成技術である。この技術によって、歌が歌えない人でも歌詞とメロディ（楽譜情報）を入力できれば、自分の楽曲に合成音声による歌声（80 種類超のボイスバンクから選択可能）を生成することができる。すなわち、自分の PC やスマホが「ボーカル生成 AI」的な音楽スタジオになると云うことである。そして、その歌声を出す代表的なキャラクター／バーチャルシンガーが「初音ミク」（2007 年、クリプトン・フューチャー・メディア㈱制作）で瞬く間に人気を集め、そこから多くの楽曲が生まれ、ボカロ文化が一大ムーブメントとなった。こうしたボカロを使って音楽を作る人々は「ボカロ P」と呼ばれ、米津玄師や YOASOBI の Ayase、Ado などが有名である。

初音ミクをはじめとするボカロキャラクターは、日本の文化として世界が認めているアニメ、ゲーム、フィギュア、コスプレなどの文化の延長線上にあると思われる。加えて、自由な「二次創作」が許可されているため、ファンが自分なりに制作したり再解釈することで、次々と新しい作品（ジャンルを超えた派生文化）がグローバルなレベルで自己増殖して「ボカロ文化圏」（コミュニティ）が形成されていくエコシステムの仕組みが現代的である。大いに参考になる。

さらに、ボカロは単なる音楽文化にとどまらず、社会的な意義も持っている。世界の多くのファンが「ボカロ」の楽曲に心の支えを感じ、「自分は一人ではない」と感じることで、孤独感や社会的な孤立感を乗り越えている。ボカロ文化は、特に若い世代にとって、精神的な支えや希望を与える存在「居場所」となっている。その背景には、初音ミク／ボカロに自分の思いを投影し感じることは「能面」「能文化」「余白文化」に通じるものがあると云う。奥が深い。

初音ミクを生み出したクリプトン・フューチャー・メディア㈱は、北海道札幌市を拠点に、世界規模で音楽ビジネスを展開しているが、ここ 10 年来、実現に向けて取り組んでいる「妄想」が「地元の北海道をクリエイター王国にすること」。「野菜を育てる人も、町をつくる人も、クリエイターは付加価値を生むのが仕事」「北海道に限らず、地方ではどうも付加価値をつけるマインドが弱い人が多い。もともと何かを生み出す力はあるのだから、テクロノジーとかけ合わせて付加価値を高められる人を育てれば、地域はもっと楽しくなるはずです」と云う。

確かに、いま、まちづくり・地方創生に求められているのは、クリエイターであり、高付加価値産業興しである。そして、クリエイターが地方で活動し、世界を相手にビジネスができる時代が来ている。ボカロ文化の根っこも、「個」のクリエイターである。「初音ミク」はそうした象徴なのかもしれない。「日本発の文化」は「日本の宝」であり、地方にこそ眠っている。

補：本コラムの詳細＆参考資料等は、https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/ に掲載